

外国語教育

北海道の英語教育の方向性

～行政は目標に掲げていることと現場の実践～

小山内 洸

研究と討議の記録

本稿は今野量介氏が執筆したブックレット用論稿に肉付けする意図にもとづき、実践・研究発表レポートの内容をできるだけ詳しく紹介することに力点を置く。今野氏は論稿の随所で簡潔・適切なコメントを述べているが、英語科教育（小学校英語活動を含む）を担当する多くの先生方に本稿を「資料」として合わせ読んでいただき、今後の実践・研究の手がかりにしていいただければ幸甚である。

基調報告 外国語の授業で「学びが起こる」ために一言語の実地使用と特徴を学ぶことの両立、自尊感の育成、そして教師間および教師-生徒間の関係の構築

報告者 杉山 譲司（共同研究者）

1. 本分科会の研究課題

(1)外国語教育の現状と課題-生徒の学力の実態・外国語教育の現状をとらえ、実践と研究の課題を明らかにする。

- ① 小学校の英語活動を含め外国語教育の目的と全体構造を明らかにする
- ② 新学習指導要領の問題点を、実践的・理論的に明らかにする
- ③ 評価の方法と課題を明らかにする

(2)外国語教育の内容と方法

言語体系（音声・文字・語彙・文法）の教育内容と方法を明らかにする

- ①言語活動（音声コミュニケーションと文字コミュニケーション）の教育の内容と方法を明らかにする
- ②取り上げる材料の選定・掘り起こしを行い、その指導過程を明らかにする

2. 昨年度の分科会から

(1) 概要

2日間全体で5本のレポートと、参加者は2日間それぞれ19名（内大学生5名）、25名（同

13 名、いずれも司会者、共同研究者、運営委員、レポート発表者含む)を得た。レポートの内訳は中学校 3、高校 1、大学 1 であった。

レポートのタイトルと発表者名(所属)は以下のとおり(発表順)。

- Almost English の授業を目指して 犬上達也(南富良野町立南富良野中学校)
- 英語クラブの実践と外国語活動のこれから 記虎孝弘(枝幸町立枝幸中学校)
- 研究授業(公開授業)の目的は何か-Kさんの質問をめぐって 小山内洸(共同研究者、大学)
- 授業スタート時点の日常会話 菅野信一(厚沢部町立鶉中学校)
- 大通の英語科教師集団づくりとプレゼンテーション大会の実践-教師同士の、そして教師と生徒の協同 杉山讓司(共同研究者、市立札幌大通高校)

(2) レポート報告と議論

ア. 外国語を使うこととその言語的特徴を学ぶことの間で-いわゆる“All English”問題について

高等学校の新学習指導要領にうたわれている「授業は英語で行なうことを基本とする」という文言をめぐる議論である。外国語の実地での使用とその言語的特徴を学ぶことを二項対立的に捉えず、両面を大切にしたい授業の構築という古くて新しい議論ができた

犬上レポート(「Almost English の授業を目指して」)は、自分自身の classroom English(教室英語)の理解度を生徒へのアンケートから分析し、それをもとに高校での all English の授業についての考察を展開。①文法事項の解説はどうなるのか②今後必要とされる授業での英語は classroom English とは全く異なる力なのではないか③学文法説明など英語で通す授業が展開された場合、生徒が学習参考書頼みになってしまわないか④all English の授業は生徒によっては理解できないまま授業が進み「落ちこぼれ」をいっそう増やすのではないか⑤教師自身の英語による伝達能力の差をどう解消するのか。

本レポートにより以下の議論に発展。

- ①. 個人評価に関わる問題。all English の授業で想定される教授法の一つとして、dictogloss のようなグループで協力してスピーチを聴いて、内容を英語で復元する活動があるが、これは個人評価と馴染まない。受験学力にしても個人個人の評価が前提となるはずであるが、それを議論せずに all English の授業を言っている限りにおいて、文科省が本気であるのかどうか甚だ疑問である。
- ②. all English と文法指導について。基調報告の中で小山内はユネスコの「中等学校における外国語教育に関する各国文部省への勧告 59 号」の重要性について触れたが、そこ

では「外国語の実地の使用」と「言語的特徴を十分に学ぶこと」の両方を外国語教育の目的としている。この報告が現在ユネスコの推進している「ESD（持続発展教育）の一〇年」へと連綿と繋がっていることを考え合わせると、今ますます言語的特徴の一つである文法指導の大切さを再認識すべきときなのだと言うこともできよう。ただし、私たちは all English 問題の議論を好い契機として、いよいよ伝統的な文法指導を越える方法の模索を始めるときに来たのではないか。

- ア. 協同で学び合える外国語の授業について-信頼と自尊心を育む授業スタイルへの転換
- イ. 小山内は昨年の基調報告の中でその前年の分科会の基調の橋渡しとして、伝統的な知識注入型の教育を課題提起型の教育へ転換していく必要性について改めて触れた。教科書に書かれている知識を切り売りするのではなく、生徒達が協同で学び合えるような課題が提起されるような教室である。英語の授業に絞り込んで考えるならば、言語=道具であるという考えに立脚して、内容よりも四技能のスキルの伸長に重きを置くのか、それとも生徒の実感が伴う内容、現代的課題に取り組めるような教材を配して、それに取り組むことが同時に必然的に英語を使うことになるような授業を仕組むのかということである。

菅野レポート（「授業スタート時点の日常会話」）は授業開始時のウォームアップのペアによる会話活動を、自然で、意味のあるものにしたいというテーマを持った、中学校の複式学級のクラスでの実践である。授業で取り上げた構文のうち、「It is ~ for 人 to …」と「how to ~」の二つを入れた対話文を生徒二人組になって作って発表するという活動だった。本実践の意義は対話文の中に隠された「共感」である。菅野は生徒達に常に「共感」するよう対話文を作るよう指導している。拙いように見える会話でも、その時点で生徒が持っている言語材料でもってコミュニケーションが成り立っていると見えよう。

記虎レポート（「英語クラブの実践と外国語活動のこれから」）は「小学校・中学校における外国語活動のあるべき姿について考察」したいということをテーマとした、中学校での学年を越えた英語クラブの実践報告である。複式学級や学年を越えたクラブには年齢・世代の違いによる異文化交流が見られるはずである。

本レポートにより以下の議論に発展。

- ①. 生徒達が協同で学び合える活動の中味と仕組みのヒントがそこにある。ともに学ぶ仲間（生徒同士、生徒と教師、生徒とALT）がそれぞれ違った体験、言語経験をもっているということを認識し、一つひとつの対話を異文化との出会いとして受けとめる場を私たち外国語教師は提供したい。
- ②. 小山内が討議の際にフィンランドの教育観を引いて紹介した「学びはどう起こるのか」

ということである。anxiety と fear の教育に対する、respect と trust の教育である。前者においては、判定され評定をつけられて、競争させられ常に人と比較されると、「勉強させられた」という感覚はあっても、自分から勉強したという感覚は育たない。一方安心感があって、自分のことを聞いてもらえて、リスペクトがあり、励ましがあって、信頼されているという感覚が育つと学びが起こるといえる。

イ. 同僚性の構築と教師と生徒の関係性の捉え直しについて

昨年度からの橋渡しとしてもう一点小山内が強調したことは、職場における同僚性の構築である。特に管理統制が強化されている昨今の教育現場においては、同僚性の構築もまた「闘い取る」課題となっていることを参加者に喚起した。

小山内レポート（「研究授業〈公開授業〉の目的は何か-Kさんの質問をめぐって」）は、研究授業の議論。まず授業とは何かという考察から始める。授業とは個性を持つ生徒と個性を持つ先生がその「個性を媒介項として相互交渉する」場であるとする。生徒のみならず先生も授業から恩恵を受ける主体に含める立場をとるのであるが、もし先生をそこに含めないとすると、先生は「孤独でちっぽけな権威者」になってしまう。次に研究授業についての考察であるが、それは授業研究を科学的に進める方法であるとする。授業はそもそも研究と同じで、ある教育的な働きかけを仮説として立て、その結果を検討して、教授者の専門的な知識や技術を進歩させることができる。その研究を準備段階で同僚と討議することで、集団的に向上していくことが可能である。「集団的な討議と向上」という部分に同僚性の構築の姿を見て取るわけであるが、小山内は同時に前段の授業の定義において、教師と生徒の協同がなければ前節で述べたような本当の学びは起こらない、ということも念頭においているのであろう。

杉山レポート（「大通の英語科教師集団づくりとプレゼンテーション大会の実践-教師同士の、そして教師と生徒の協同」）は勤務校で毎年行なわれているプレゼンテーション大会という、一年間の授業実践を生徒と教師が協同で発表する行事の実践を報告した。英語科教員同士の学び合いが、他教科にも飛び火する。同僚性の構築がこのような行事を成立させるために必要であったし、逆に、この行事を続けることが同僚性を維持することにもなると言える。授業のあり方を伝統的な知識注入型から課題提起型に変える必要が生まれてくる。そこで教師と生徒のあり方が問われるわけである。

上記レポートの発展議論として；

respect と trust を教師と生徒が相互に持ち合い、どちらも授業から成長する糧を受ける、そのような関係性の中に本当の学びが起こるのではないだろうか。翻って授業公開のあり方をもう一度考えるとき、このような視点を研究授業を行なう側と見る側の両方が持ち、教師同士もまた批判的協同探究者として授業改善を目指したい。単に教師と生徒のやり取りを技術的に問うのではなく、そこにどのような関係性を切り結ぼうとしているのかを見るということである。もう少し具体的に言うならば、教師と生徒との対話、生徒同士の対話、教材の内容と提示の仕方などに教授者の意図を捉え、そして

それが生徒一人ひとりの学びに結びついているかを丁寧に観察するということであろう。

1. 昨年の課題から、今年度の期待したい報告・議論

- (1) 言語的特徴、すなわち文法の指導を新しい視点で行なった実践。文法をそもそも「説明する」ものという発想を脱却して、「使う」ことで言語及び言語的特徴への理解が深まるための方策は何か。
- (2) 協同で学び合うことのできる活動の内容として、一昨年の分科会で議論したESDの観点を持ちたい。地球規模または地域の持続可能性に関わるような教材や活動に、外国語（英語）の授業のなかでどう取り組めるか。
- (3) 自尊心の育ちを大事にした、本当の「学びが起こる」ために、基礎レベルから常に根拠をもった自分らしい判断（問題解決的思考、批判的思考、創造的思考など）ができるような授業の再構築が求められるという（汐見稔幸。「生きる力」から「シティズンシップ教育」へ—新学習指導要領の学力観を問う。「教育」2011年5月号）が、そのような外国語（英語）の授業とはどのようなものか。
- (4) 授業研究、授業を見る視点と関連して、自分が教師として生徒とどのような関係性を築こうとしているのかを振り返ることが必要であると思われる。そのために、ある生徒に焦点を当てながら授業を読み解くという報告があってもよいのではないか。
- (5) その他の点として：レポートの内容とそれに関わる議論は、1で見た分科会の研究課題に寄り添いながらのものにはなっていないが、その点をどう見るか。当分科会の大きなテーマとして定められているので、ここ数年続けてきたように、その年その年の議論は提出されたレポートと参加者のニーズに応じて進めることで、大枠で本課題について考えることになっていると見るのか。それとも毎年成果を着実に積み重ねるためにも本課題に沿ってレポートを組織するか、それが難しい場合でもレポートを本課題にしっかりと位置づけて、議論を進めていくのか（昨年度は前者の立場であった）。

レポート発表1 （発表者 記虎 孝弘氏・枝幸町立枝幸中学校教諭）

少人数授業の実践

1. はじめに

本校が2年前から実践している少人数授業の実践について、「課題と成果」並びに「少人数だからこそできる言語活動」を中心に報告する。「学生の方には学生の方の視点で、教員を経験されている方には経験に基づいた」質問や意見をいただきたい。

2. 学校紹介

全生徒 148 名 (2 クラス×3 学年)。宗谷管内では大規模校。教員 18 名 (うち英語科担任は 3 名)。

3. 少人数指導について

(1) 導入の背景

1、2 学年で実施。導入 2 年目。目的は英語・数学の学力向上。「一人ひとりに手厚い教科指導」をすることがねらい。英語科のほかに数学科でも 1 学年で実施。

(2) 成果と課題

1 クラス 24~27 人を半分に分ける。1 クラスは 10 名ちょっと。当初は「習熟度別」で少人数のクラスを編成。しかし「学習意欲に差がでてきて成果がなかなかあがらないので」1 学期後半から「コース希望別」にして均等なクラス編成に変更。

(成果) 少人数でしかできない言語活動ができる。学習支援がしやすい。一人ひとりの学習の習熟がよくわかる。教材準備がしやすい。

(課題) 集団としてのパワー不足。学習意欲自体はそれほど上がらない。進度を合わせないと生徒も教員も混乱する。

(3) 少人数授業のこれから

「長らく」英語、数学、(最近は理科も) ティームティーチングを実施。→しかし、教室を分けて「少人数授業」にしたほうがより効果的な教科指導ができるのでないかと考え→導入当初は「意気込んだ」が→導入 2 年目で「このままでいいのか」という壁にあたっている。よりよい少人数授業の実践例や提案をきいて参考にしたい。

4. そのほかの英語科の取り組み

- (1) ALT の活用 (スピーチの作成、英文添削、言語活動の発案など)
- (2) 英語検定 (2011 年度第 1~2 回の参加者 18 名、合格率 7~8 割)
- (3) 英語クラブ (顧問は教員 3 名と ALT、部員は 10 名、半数以上が運動部にも属す)
- (4) 枝幸町研究会 (月 1 回程度、町内のすべての教員が集まり、教科研究をすすめる)

レポート発表 2 (発表者 菅野 信一氏・厚沢部町立鶉中学校教諭)

簡単に英会話

第一部 支部教研のレポートから

英語を話すことに対する生徒の気持ち→「嫌だな」 ①「聞き取れない」(えっという顔で固まってしまう) ②「一番に言いたいことが英語で出てこない」(習ったことない)

それに対する指導のポイント→「さしあたって、何かきかれたら相手の言ったことを繰り返してみる」(耳で聞こえたものを「繰り返して」口にするのは「(言いたいことを) 考えてひねり出すのとは違い、「気持ちの上での抵抗が少ない」)

指導例

①あいづちを打つ

I like Chung Gun Sogk.	Oh, you like～.
I have a sister in Sapporo.	Oh, you have～.
I swim in the sea during summer vacation.	Oh, you swim～.

②聞き流す

Do you like Chung Gun Sogk?	Do I like～?
Do you have a sister in Sapporo?	Do I have～?
Do you swim in the sea during summer vacation?	Do I swim～?

③会話を組み立てる

Do you like scrambled egg?
 Do I like scrambled egg? No, I don't.
 I don't like scrambled egg. but I like eggplant.
 Oh, you like eggplant.

(レポートにはこの種の会話活動例多数あるが省略)

第二部 合同教研のための補足

①授業の中での指導手順—日常会話は授業始めの10～15分をとって指導。

②会話の構成を定式化

- a. 聞き返しをする (質問内容を確認する)
- b. 短い答えから、丁寧な答え方までする。
- c. 付け加え情報。肯定文に対しては否定文、否定文に対しては肯定文を付け加える。
- d. 相手が答えてくれたことにあいづちを打つ。

③この指導法のポイント

- ・「その場で考えなければならない事柄を増やさずに、会話量」を増やす。
- ・「会話した気にさせる英会話」をめざす。

(例) (A)	(B)
Excuse me.	Yes.
How is the weather?	It's cloudy and cool.
When is your birthday?	It's July sixth.
Do you like buggy?	Do I like buggy?
Yes.	No. No, I don't. I don't like buggy.
	I don't like buggy, but I like snowmobile.
Oh, you don't like buggy, but you like snowmobile.	Yes.

資料 校内研指導案 (要点のみ抜粋)

①生徒 鶉中学校1年生 4名 (男2、女2) 指導者 菅野 信一

②単元 New Horizon English Course Book 1 Unit 5 おまつり大好き Part 2 数を

たずねよう 「何枚 (いくつ) の？」という表現を、お祭りの中で金魚すくいの体験をする中で、提案・指示・申し出などの表現をとおして学ぶ。

③生徒は互いにまるで兄弟のように育ってきたことがうかがえる。授業中でも困って固まってしまう仲間にもヒントを与えようとする様子や、教え合おうとする様子が見られる。

④校内研とのかかわり 本校の研究テーマ「自律的な学びを育てる指導の工夫」

(研究仮説)「学習計画の中に、『学習内容の振り返り』と同時に『取り組みの振り返り』を組み込むことによって、生徒の自律的な学びの基礎が築かれるだろう」

(研究1年次の目標)「振り返りの習慣化を目指す」

*教師自身が「いま何を学習しているのか、何のための練習をしているのか」を意識し、生徒にもそのことを意識させながら授業を展開したい。

その他の取り組み

①フラッシュカードについて 新出語の初見時に「指導者は範読せず、推測読みをさせる。」その後で正しい発音を示し、リピートさせる。語の意味についても、調べてきたことを発表する機会をつくり、学習の「自律」につなげる。語の意味について、本課で使われている意味の他に関連して覚えたほうが良いことを指導する。

②挨拶表現、日常使う質問文、既習の英会話を整理して、いつでも使えるようにする。

レポート発表3 (発表者 犬上 達也氏・富良野町南富良野中学校教諭)

中学教師として小学校外国語活動の実践を試みて

*発表者所用で欠席となったためレポートのみの参加であった。

1. 町内小学校に見られる状況と町のうごき

・南富良野町は林業、鉱業、農業を中心とした町。人口約2800人。小学校5校(総児童数136人)、中学校1校(生徒数58人)、高校(普通科1間口)。8年前に中学校は4校から1校になった。

・学校によって扱いにばらつきがある小学校の外国語活動(単式校は何とか実施できるが、複式校だとA年度B年度と分けた指導をせざるを得ない)を統一的な指導の方向にもっていけないかを町として考えることになった。理由:①中学校入学時に英語学習の既習事項に差が出ないようにする必要がある、②中学校英語の導入をスムーズに進める必要がある。

2. 問題点—各小学校とも生徒数が少なくコミュニケーション活動を行いにくい状況にある(考えられた案)

落合小(6年3名) — 北落合小(6年1名)	隔週で双方の学校に移動(3校時)
金山小(5年3名) — 下金山小(5年3名)	同上(1校時)
金山小(6年1名) — 下金山小(6年1名)	同上(2校時)
幾寅小(5年11名、6年23名)	自校で実施

3. 上記案を実施するために、中学校教員（発表者）が小学校に出向して授業を行うことになった。そこにさい、いくつか対応すべき重要なポイントがあった。第1に、A年度B年度の授業サイクルが異なる学校が組み合わせられた場合、あるいはサイクルは同じであっても授業で扱われた指導事項が違った場合、このような場合には既習事項に当然ダブリや欠落が生じ、そのことを徐々に解消していく授業プランづくりが必要であった。第2に、中学校側として対応しなければいけないことがいくつかあった。それは、①中学校が本務校なので週あたりの時数（TT）は12時間以上であること、②学校行事では中学校の行事に優先的に対処すべきこと、③移動時間を十分に確保すること、④教材教具の作成費用に中学校英語科の予算を当てられるようにすること、⑤中学校教員（発表者）の校務分掌上の負担を減らすこと、などである。

4. 小学校への移動と授業の展開

(1) 中学校で2時間目のTT授業を終え、10:05頃教室を出る。たとえば、落合地区の小学校までは約15分かけて車で移動。シカやクマに会わないか心配。小学校では職員室に顔を出し、「おはようございます！ よろしくお願ひします」と挨拶する。教室に行き、Hello, how are you?と言って、PC映像やプロジェクターをチェックする。

(2) 授業は可能な限り英語を使ってすすめる。授業者の「地声」で授業を行うことを重視し、PC映像に過度に頼らないようにする。別紙授業プランは省略。

5. 疑問と不安、そして残された課題

(1) 複式校で顕著にあらわれる大きな問題—小学校の先生（学級担任）と一緒に授業が組めない。たとえば、会場校が落合小の場合、北落合小から6年生児童のみが落合小に移動してくる。北落合小の学級担任は自校に残って4年生を指導する必要があるので落合小にこられない（英語活動の授業に参加できない）。移動先の落合小でも、学級担任は複式なので4年生にたいして「同じ教室で別教科」の指導する必要がある。よって、英語活動は一部のみ「参加」「観察」ということになる。（英語活動を行う）児童を「担任の目」で十分に評価できない。

(2) 車で移動するので、不慮の事故が心配（野生動物がたくさんいる）。

(3) 中学校「英語」へのスムーズな道筋が開けるか。生徒は「英語もういい」となりはしないか。

(4) 経費の問題—複式校児童が会場校に移動するための費用、巡回教員（中学校教員）の交通費などは、小さな町の少ない予算でやりくりされている。いつまでもつか。成果をどうやって出すか。

(5) どうしたら小学校学級担任主導の外国語活動に引き継げるのか。その展望が描けない。

以上みてきたように課題山積だが、発表者は「中学校に長年勤務してきた者として小学校に授業者として出向くことに喜びを感じ始めているのは事実」と結んでいる。

レポート発表 4 (発表者 ト部 喜雄氏・美唄尚栄高校講師)

英語「きれい」から「すき」への挑戦

発表者は、道立高校の校長職を定年退職してから 10 年間、大学や高校の講師として「若い世代との「つきあい」を楽しんできた。現在は美唄尚栄高校で週 3 日 1 年生に英語を教えている。その経験と教訓を伝えたレポートである。

1. 広がっている低学力

- (1) 平均点の計算ができない—特に割り算や小数点の計算が苦手。
- (2) 英語の be 動詞もだめ—「ごちゃごちゃしてわかんない」という生徒が多い。
- (3) 「わかりません」が決まり文句—「心の扉を開けなければ、知識は入らない」。
- (4) 「今の中学生は、学力が両極端」—発表者は道高校教職員センター附属教育研究所・相談所の事務局長もつとめている。そこを訪れた中学校教師のことば。
- (5) 高卒の資格だけはほしい—高卒の失格がないと仕事がないから、資格だけはほしい。「テストに出るの？出るところだけやって」「私は、英語大っきらい。勉強はしないから、授業中かまわないで」「ゲームやろう」「ビデオ見たい」などの生徒の声。
- (6) 「競争で伸びる」神話がまだ生きている—「競争」から「協力」への転換が必要。

2. 私の試み

- (1) わかるまでやりましょう—「ゆっくり、わかるまで教える」「分かった時の笑顔は宝」。
- (2) 人はどうして学ぶ？—地球史や人類史に関するクイズやお話で、自分の存在意義と「学び」の必要性を説く。
- (3) 英語をなぜ？—すごく多い疑問。いろいろな民族の歴史、文化、考え方を知ることの意義、言語は伝達のツールでもあるから「通訳なしで話せる」ことの喜び、「みんな違って、みんないい」の精神、などを分かりやすい例やことばで教える。
- (4) 言葉には内容が必要—アルファベットの学びなおしでも、知的内容を豊かに広げて教える（文字の歴史など）。
- (5) 授業は楽しくなければ—「授業は生徒と教師が作る瞬間芸術」。教室に入って瞬時に一人ひとりの生徒の状況をつかむ。問題のありそうな生徒を授業に引き込む工夫をする。
- (6) 言葉には内容がある—「役に立つ英語」も重視。日本国憲法の重要な条文 10 章を英語と日本語で教える。キング牧師の演説も教える。「花咲き山」を紙芝居にして英語と日本語で演じる。

3. 私の工夫

その 1. 簡単な英語で会話—(例) What day of the week it is today?/ What time did you go to bed yesterday?

その 2. 英語の歌を教える—ドレミ、エーデルワイス、We shall overcome、Danny Boy など 30 曲入り歌集を配布。

その 3. 単語のビンゴゲーム

その 4. 全員のカード—氏名やグループ分けに使うほか、日付と質問内容を記入しておく

と便利。

その 5. 指パチンで静止一発問と同時に、指をパチンと鳴らす。全員静止して、最初に動いた生徒が「あたる」。静止している間に質問を繰り返す。

その 6. 小テストにメッセージテスト用紙の余白に教師への疑問、要望、カットなど何でも書かせる。返信は全員にする。そこに「中学校では、何が何だかさっぱりわからなかった。だから、英語は大きらいでした。高校に来て、先生がゆっくり、わかるまで教えてくれるので、だんだん好きになってきた」「英語の歌を歌えるので楽しい」「先生の授業は、中身が濃い」などの感想が書かれたりする。

最後に「教師に自由を与えることが大切で、管理からは何も生まれない」フィンランドの教育改革を担った教育大臣の言葉に深く共鳴。

レポート発表 5 (発表者 杉山 譲司氏・札幌大通高校教諭・共同研究者)

東日本大震災被害者への英語メッセージ翻訳活動 その実践報告とプロジェクト型学習の評価について

1. はじめに

第 49 回新英研全国大会・第 5 分科会（学力と評価）で発表した報告である。

2. 本実践の背景

(ア) 大通高校について

午前部、午後部、夜間部の 3 部をもつ札幌市立の単位制高校。各部 4 間口で 1HR に 25～30 名の生徒が所属。全校生徒約 1000 名。年齢、学習経験、進路目標、心身面の状況、文化的背景などがさまざまに異なる多様な生徒が学ぶ。2008 年開校。中学校で不登校または長欠（1 年間 30 日以上または 3 年間で 100 日以上の欠席）を経験した生徒が約 40%を占める。カウンセリング体制を強化するとともにコミュニケーション能力を養うためのクラスや年次の活動を工夫している。

入試に海外帰国枠を設けている。現在、外国籍生徒あるいは帰国生徒（合わせて「渡日生徒」としている）は 14 人（内訳：中国 6、ロシア 4 人、スリランカ、ニュージーランド、モンゴル、フィリピン各 1）。このことは大通高校がユネスコスクールでもあることとあいまって「大通に多様な文化が共存している」という生徒の感じ方に影響を与えている。

教育課程では、生徒の興味関心と進路目標に対応する多くの学校設定科目と同時に、普通科目と専門科目を置いている（英語科、家庭科、商業科から複数の科目を配置）。英語科では「異文化理解」「コンピュータ LL 演習」「生活英語」（本レポートで実践報告する科目）の 3 科目を配置。その他に、教科縦断の授業への取り組みも進行中。毎年 12 月にプレゼンテーション大会（授業を中心とした教育活動の成果を発表する）を 2 日かけて実施。

(イ) 「生活英語」について

学習指導要領で英語科の中に設置されている科目（科目の目標・内容の詳細省略）。2 単

位科目で週 2 時間とされているが、大通高校では 2 時間連続の 90 分授業として週 1 回実施（半期ごとに分割単位認定）。学習指導要領上の「日常生活に必要な英語の知識技能」という教科内容にくわえて、「英語を含む外国語とその文化への意識を高めさせる」とともに「それを通して現代的課題に取り組んで発信してほしい」ということを英語科の共通認識としている。

「生活英語」は開始後 3 年目。これまでの取り組み—生活の中で見られる英語または外国語調べ（新聞に見られる外来語、商品名の和製英語、英語手帳など）、日英文化比較（ことわざ、CM、履歴書など）、英語発信プロジェクト（校舎内施設の英語標記、旅行サイトを使用した札幌紹介など）。

（ウ）履修者と修得状況

本校の外国語（英語）の必修科目はオーラルコミュニケーション I (OCI) または英語 I。3 分の 2 の生徒が OCI を選択。英語苦手意識のため多くの生徒がそれ以外の英語関連科目を履修せずに卒業する。「生活英語」を選択する生徒は、「英語は苦手だけど何か英語にふれておきたい」「同じ時間帯で他に取る科目がない」などの消極派と「英語が結構好きで活動できる英語を学びたい」という積極派が混在。昨年度の履修者数は 3 部合計で 62 名（うち単位修得者は 40 名）。未修得者はすべて欠席時間超過のため。

3. 本実践のあらまし

（ア）実践動機と年間計画での位置づけ

実践動機—3.11 大震災で「世界中の人たちの被災者・被災地に対する励ましの声の中で、日本語で語られず、書かれないままにいるために届いていない声があるはずだ。そんなメッセージを集めて、日本語にして被災者に届ける活動ができるのでないか。」

年間計画での位置—年間計画表（省略）を示し、後期（10 月）から活動を始めることとした。

メッセージの集約—①ルイジアナ州立大学附属高校（学校間交流実施校）に依頼、②他の先生の知人・友人に依頼、③札幌市の ALT の催しで依頼。集まったメッセージは 70 通以上。

（イ）授業の実際

動機づけ（1 週目）—①海外のニュースの視聴および読解（タスクとして、穴埋め聞き取りと読解）②復興支援ソング（Sing Out from Japan から One Love/上を向いて歩こう）を授業開始時に繰り返し視聴

翻訳作業の下準備（2～3 週目）

③語彙集づくり—ニュースで聞き取った英語などから各自で My own dictionary を作成。最終的に全員分を 1 つにまとめた。④翻訳合戦—メッセージを書いてくれた人の思いを間違いなく伝えられる日本語訳の共有（苦労した点や工夫した箇所などの発表・確認）

実際の翻訳メッセージの作成（4～7 週目）

⑤メッセージの翻訳（各自 2～3 通を担当、翻訳合戦で得た知見をヒントにして作業）⑥

翻訳メッセージの吹き込み（実際のメッセージを背景にその翻訳担当者の声を重ねて 1 枚の DVD に）⑦メッセージと翻訳台紙の作成（メッセージと翻訳を一つひとつ A3 版の台紙に貼り、一つのアルバムにして送る）⑧気仙沼小学校へ（同校の先生から、「みなさんのメッセージと訳文を持って、元気を失っている方のところを訪問して、読み伝える活動を子どもたちにさせたい」という申し出あり）

プレゼンテーション大会と、それに向けての発展学習（8 週目）

⑨上記⑥⑦を展示場所に持ち込み、4 枚のポスターを使って発表（生徒が交代でビデオ上映と訪れた人からの質問に対応）⑩原発事故についての学習（NPO 法人「チェルノヴィリへのかけはし」の代表者による特別講演をきく）

フィードバック、リフレクション、評価（9 週目）

⑪プレゼンテーション大会のフィードバック（「海外の人も日本に優しいし、それを訳した皆もえらい」「自分も世界のために何かしたいと思った」「日本語と表現のしかたが違うので大変だった」などの感想交流）⑫生徒自身のリフレクション（今回の翻訳作業を通して感じたこと、学んだことを書いてまとめとする）⑬以上述べた全作業を評価対象に（後期評価対象の 4 割を占めた）

（ウ）実践の反省点と課題

- ・もっと広範にメッセージを集められなかったか
- ・語彙集作成にもう少し時間をとるべきだったかも
- ・翻訳合戦で生徒同士の相互評価を組織すべきだった
- ・実際の翻訳文も生徒の相互評価を取り入れるともっと質が高まったかも
- ・プレゼンテーション大会で参加者との討論があればよかった
- ・このようなプロジェクト型の学習でどう学習成果を十分に評価するか

上記の反省点を生かしてグループやペアでの活動を含め協同学習の形態をさらに実践を通じて深めていきたい。また、プロジェクト型学習の評価としてポートフォリオ評価の可能性も追求したい。（以下、詳細な学力・評価論については省略）

本報告執筆者のまとめ

本年度から集録作成の方針が変わり、従来の書籍型の集録に代わって「ブックレット」用と「ホームページ」用の 2 種類の報告文書をまとめることとなった。筆者は両者の関係を必ずしも正確に理解しえていない。もし両方の文書が必要であるとすれば、前者は分科会討議の流れを概略伝え、後者はレポートをややくわしく客観的に紹介して資料的な意味をもたせるのがよいだろうと判断した。そのように考える以外、報告を 2 種類に分ける意味が了解しにくい。また、次年度レポート発表を予定する分科会参加者は前年のレポートを詳しく知ることが役に立つと考えられる。以上のような理由から、あえて発表レポートを客観的に詳しく報告する体裁をとった。

いま改めて全レポートを読みなおしてみると、いずれのレポートも真摯な教育的情熱の結実であり、さまざまに困難な課題に立ち向かいながら英語教育をよりよく改善していくためのヒントと手がかりが満ち溢れているという感を強くする。その意味ですべてのレポートが実践・研究の宝である。明年度もぜひ多数のレポートの発表を期待したい。

なお、経団連や文部科学省が出す英語教育関係の提言は、英語は「コミュニケーションの道具」、その道具を使える「人材養成を」というトーンで一貫しているが、そこでは外国語教育が「世界に開かれた窓」を提供し、そのことを通じて人格形成に寄与する（あるいは寄与すべき）という視点を完全に欠いている。本分科会は後者の視点を大事にしながらねばりつよく英語教育の実践・研究を継続していくことに引き続き努力を傾注すべきであるし、そこにこそ存在意義があるものとする。